

令和6年度第1回射水市ひきこもり支援推進協議会議事録

日 時 令和6年9月27日(金)

午前10時～午前12時

場 所 射水市役所本庁舎4階 会議室401

1 開会

2 部長あいさつ

3 会長及び副会長の選出

4 議事

(1) 令和5年度事業報告 資料1

【質疑応答】

委 員：3ページの相談に対する主な対応内容で、医療面の支援が倍以上になっている。これは何か特別なことがあったのか。

事 務 局：令和4年度から令和5年度にかけて、相談内容項目を大幅に見直したことにより、医療・健康の中でも心・身体・障がいの詳細に分けた。そのため、医療というより健康面、心理的な面での相談に対しての内容となっており、既に医療につながっている人が、すてっぷの相談の際に、心の悩みを訴えられることが多いことが、数字となって表れている。

会 長：実際、心の問題はたくさんあり、今後も増加していくと思われる。そこに対してきちんと方策を立てていくのかという提言である。

委 員：1ページの相談者の内訳で、本人からの相談が多いことに驚いている。厚生センターに相談に来られるのは家族が多く、中々本人と会うことが難しいことが悩みである。実際の人数では、どのくらいの人から相談を受けているのか。

事 務 局：資料からは、本人との面談の回数が多いことが見えている。本人と継続して関わるようになってきたことが、ここ1・2年の成果である。それ以前は本人と家族の割合が逆転していたと思う。すてっぷでは、相談内容を適切に分析、アセスメントをした結果、早期に就労や医療につながる支援を密に行えている。

委 員：イメージとして、家族からの相談が多く本人相談は少ないと思っていたので、本人からの相談割合が多いというのは、相談回数が多いということか。

事 務 局：資料の数字での実人数はないが、直近令和6年8月末時点では、すて

っぱが関わっているケースのうち、半分以上は本人と会えているケースである。

委員：本人からの相談が増えたのは、アウトリーチをするようになったことが大きい。訪問することで、本人とつながる。本人も相談に乗ってもらえる安心感を得られる。

委員：市内で現状ひきこもりの人は増えているのか教えてほしい。また、市の施策として、ひきこもりをつくらない観点で進めてほしい。自分は、中学校卒業後のひきこもりの人達の様子を見ているが、新しいひきこもりになる人を作らない、学校だけではなく働きながらひきこもりになる人もいると思うので、啓発が必要である。

会長：ワーキング部会での意見で福祉と教育の連携と記載がある。中学校までは市教育委員会が管轄で、高校になると県教育委員会となるので、市の事業として高校へは動きにくい、そこを積極的に動いてほしい。令和２年度にこの会議が始まった時に、市でひきこもりの推定人数があったが、その後の増減の動向は市でデータとして把握しているか。

事務局：市で最近の実態調査を行っておらず、現状把握はできていない。

委員：平成３０年に民生委員児童委員が各地区のひきこもりの状況を調査した実績がある。過去に資料として提示されて推計１２２人となっていたと思う。それから６年余り経過しているが、調査は行っていない。

委員：私自身も民生委員児童委員や社会福祉協議会役員として活動しているが、ひきこもりの人は増加していると感じている。土地柄、包み隠されていることもあると思うが、若い世代がいる家庭で常に車がある状況などからひきこもっていることが分かることもあり、増えているのではないかと考えているが、はっきりとした数字としては分からないが、調査した数字よりははるかに多いのではないかと。

委員：スクールカウンセラーとして勤務しているが、最近は教育委員会も不登校やひきこもりを作らないために、心理士が心理教育を実施している。どうやってＳＯＳを出すか、また考え方ひとつで生き方が変わる、辛いことがあってもとらえ方ひとつなんだという認知行動療法を伝えている。高校もこれから、大学や社会に出ていくときに、心の持ちようを伝えていくのが大切ではないかと思う。

会長：根拠となるデータがないと、机上の空論となってしまうので、把握できる範囲で実数を把握されて、その中でケース事例をワーキングの中で議論していくと、細かい対応策につながると思う。

(2) 令和６年度事業計画 資料 2

【質疑応答】

委員：ひきこもっている当事者はそれなりの理由がある。ただ、ひきこもっているとしても、健康については自分で留意して病院は受診している。病気を治そうとはしているが、社会とのつながりを持つことは難しい。ひきこもっている人達は、デジタル機器とよくつながっているため、デジタルの媒体を使ってつないでいく仕組みを作れないかと思う。ここ数年社会福祉大会の講演はひきこもりを意識して開催している。今年は現役で活動している人から話をしてもらう。この大会に参加出来ない人にもこの話を伝えられる手段があれば、ひきこもっている人たちにも伝わるのではないか。

事務局：現在は、紙媒体での周知が主となっており、社協の広報紙「福祉いみず」では令和6年8月号に特集を組んだ。紙媒体でご覧になった人には反響が大きかった。また、携帯が普及しているため、勉強会などの申込については、QRコードを掲載すると、半分以上の方が利用されていることから、デジタルの利用は効果的であると思っている。

配信の面では、令和5年度の社会福祉大会での講演では、限定公開でYOUTUBE配信を行ったが、今年の講演は、一般公開する予定になっている。加えて、家族会勉強会についても当日参加できない方向けにYOUTUBE撮影をして配信することとしており、少しずつ当事者やその家族に向けて、時間・場所問わずに悩みに寄り添えるような対応を検討している。

委員：当事者の自立支援については、資料に記載されている2つの事業があげられるが、ひきこもり当事者たちは、生活困窮者自立支援制度に対して、さし迫った人にしか当てはまらない、現時点で生活に困っている訳ではないから、生活困窮者自立支援制度で助けてもらえるのかと思っている。一方、就労準備支援については、障がい者だけが就労機会が与えられて、障がい者でない自分たちは当てはまらないと考えている。当事者の自立支援について、どこまで運用されているのか。

事務局：支援する側としては、就労することだけがゴールとは思っていない。国の事業名として、生活困窮者自立支援制度・就労準備支援事業という名称を使用しているが、支援を求めている人に対しては、その人らしく今後の人生を生きていく今に焦点をあてている。ただ、就労は分かりやすい目標であるので、希望されれば就労準備支援事業を勧める。障がいのある人に対しての就労は、障がい福祉サービス事業について、正確に理解してもらえるように説明している。働くための健康づくり、気持ちづくりから始めるので、令和5年度の実例でいうと、個人をよく理解することに焦点をあてて、本人に合う事業所を探した。本人が求めていることに重点をおいた。国の事業名として抵抗感があることについては、

噛み砕いて丁寧に説明している。

- 委員：自分がかかわっているひきこもりのケースで、ごみ屋敷となっている人がいる。社会とのつながりを閉じてしまうため、ごみ出しすらできなくなってしまい、家全体がごみでいっぱいになることで、外にでるきっかけを阻害する悪循環に陥ってしまう。このような状況を共有して、新たな課題として考えていくきっかけとなればと思う。

5 その他

- 会長：昨年度の事業及び今年度の事業内容を踏まえて、今後に向けた意見はないか。
- 委員：今まで県内各地の厚生センターに勤務し、今年の4月に初めて射水支所に赴任した。今回、市の事業について説明を受けて、活発に活動されていると感じた。
- 委員：射水市はひきこもり支援だけではなく、子育て支援も進んでいる。ひきこもりについては、自殺予防も兼ねて、命を守ることを意識して何とかしなくてはならないと動いているのではないか。
- 会長：この会議も福祉と教育両方が参加して、連動して動いていると思うので、充実させてもらいたい。
- 委員：高齢者の自宅に入って家族と話をする中で、ひきこもりを把握することもある。家族が何も言われない場合、すてっぷに相談することもある。ケアマネジャーとして訪問する際、当事者への声のかけ方についてアドバイスがあると、現場の職員も頑張って対応すると思う。
- 委員：地域包括支援センターが訪問した際に、ひきこもりを発見するケースは全国的に多い。その際本人に声掛けはするのか。
- 委員：完全に姿が見えないと難しいが、家の中で役割を持っている人にはさりげなく声をかけている。
- 事務局：ケアマネジャーから相談を受けるケースについては、ケアマネさんがまず本人と関係を築いて、すてっぷにつなげてもらい、すてっぷがバックアップする体制として、息の長い支援を続けていくことになる。個人情報守秘義務の問題もあるので、すてっぷという相談機関があることを知らせてもらい、つないでいただければと思う。本人・家族との関係性が出来ていない状態で訪問することは、個人情報勝手に流れる問題だけでなく、訪問することによって、相手を傷つけることになるため、ケアマネさんと家族の関係を継続しながら、同伴するなどの対応をしていきたい。
- 委員：いろんな支援を用意していても、心を開くのは本人次第であることを覚えていなければならない。ひきこもりの状態をアセスメントすると、

命を守るレベルから、生活を守る支援まで様々である。人生を支えるためのメニューがたくさんある中で、本人の心のカギが開いているタイミングで、本人を応援してあげる。当事者の多くは、コミュニケーション能力が不足しているため、まずは居場所を充実する支援が必要である。

会 長：中学生の時に不登校または登校しぶりの傾向のある生徒の多くは高校へ進学する。市の教育委員会は中学校までが管轄となるため、その後のフォローが出来ない。高校へ行ったけれど上手くいかない子どもに対して早期にフォローする、予防的に声をかける仕組みが、市として出来ないかが課題と思う。教育委員会として取り組めそうなことは何かないか。

事 務 局：市教育委員会は、会長がおっしゃるとおり中学校までの対応は懸命に行っている。中学校卒業後の取組は現状なかなかできていない。市として子どもたちが、不登校やひきこもりにならないように早期の対応として、今年度から教室に入れなくても学校内に相談できる教育支援センターを整備している。

事 務 局：通信制高校の連絡会が市内で開催されており、多様な進路を示すいい機会となっている。

委 員：中学卒業後は義務教育から外れる。富山県はほぼすべての中学生が高校進学するが、最近は高校を中退する子どもが増えてきている。自分の所にくる中学３年生の子には、高校に行くのも選択肢、行かないのも選択肢と伝えている。県内の高校中退者は２４７人。運営している学園には１０人程編入してくる。進路指導教諭に言いたいことは、「中学校に全く行っていない子が、果たして、全日制高校に進学してちゃんと行くと思うか」ということ。中学卒業以降の多様な選択肢を伝えるスキルと情報を持ってもらいたい。自分は、常々、中学校の進路指導の先生には、中学卒業後に全日制、単位制の高校だけではなく、高校へ行かないという多様な選択肢があることを伝えている。

会 長：以前に単位制の高校でスクールカウンセラーをしていた経験がある。中学でほとんど登校出来ず、高校へ進学したが高校で何を学べばいいか、自分がやりたいことが分からず、カウンセリングを行ったが、結局退学した生徒もいた。そのため、中学卒業時に、相談窓口や居場所があることを保護者に伝えること、また、単位制や通信制の高校に、チラシを置かせてもらうことが出来ないか、教育相談の先生とコンタクトを取って説明やチラシの配布が出来たら、それが予防や早期対応につながる。ちょっとしたつながりができたらと思う。

委 員：ひきこもりも不登校も状態である。その原因について分析して、支援

をすることが必要である。就労支援をしているが、本人の特徴について、本人自身と会社側お互いに分かってもらい、マッチングして初めて先に進む。うまくいなくて、大きな傷を負わないようにするためでもあり、失敗したときの支援も準備されている。教育では長い目で見た支援をするために、不登校の分析はされているのか。

事務局：不登校児童生徒は年々増えてきている。令和５年度の文部科学省の調査によると、小学校では、無気力・不安が７割を占め、学校の中での課題が２割、その他家庭の状況がある。中学校でも無気力・不安が最も多いが、遊び・非行の傾向のほか、家庭に課題を抱えている要因がある。

会長：不安というと漠然としているが、心の教育について市で取り組んでいることはあるか。

事務局：先の議会でも答弁したが、子どもたちが学校の中でＳＯＳを発しやすい環境を作ることが大切だと考えている。学校現場では、児童生徒が担任以外の先生誰でも相談できるマイサポーター制度に取り組んでおり、だれでもＳＯＳを発してもいいことを指導している。

勿論、症状がみられた場合にはスクールカウンセラー（ＳＣ）やスクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ）等の支援を行いながら、解決に向かうサポートはしている。さらに、家庭内の課題を抱えている児童生徒が多くなっている状況を踏まえて、令和４年度から新たにアウトリーチをする家庭教育支援員を配置して、教員・ＳＣ、ＳＳＷとの連携を図り、家庭まで入って支援をしている。

会長：人生の伴走者として長い目で見て支援をする視点は教員には持ちにくい。担任制では、１年間で一生懸命成果を出そうとする。だからこそ、学校外で長く見てもらえる伴走者が必要だと考える。

委員：地域で活動していると、なかなか学校の情報が入ってこない。学校から地域へある程度情報を知らせてもらえるといい。

事務局：守秘義務もあり、情報が出しづらいところはあるが、今年度から学校の運営に地域の方も入っていただくコミュニティスクールがスタートした。その中で話をしながら、情報共有を図っていくと数年後には連携が出来てくるのではないかと考えている。

委員：ひきこもりの方は人付き合いの方法が分からない部分が多いのではないかと。就職しても、自分と合わない人は必ずいる。普通は学校生活を通して身につけていくものだが、上手く人との接し方を身につける術があればいいと思う。

委員：自身の事業所では、心理学の専門家が集まって、勉強会を開いている。そこに、市内の中学生の不登校の親が子どもを連れて心理学を学びに

来てくれている。人間関係を学んでワークもしているので、活用してほしい。

会 長：すでに事業の運用の中で工夫している話も出て、書面ではわからなかった部分も見えてきた。今後それぞれの部局が連携して、一気に全部は出来ないと思うが、精査して出来るところから一歩ずつ進めてもらいたい。